積
34
5

鄙
34
5

玉鬘君の巻

うすき羽ぶたの
かゝぬぐべき中にうみのしづくぬべきうすけさ者て。ゆひ色ぐゝちゝみ
そのあをとゞかりハほのゝふおぢゝ。いづれとわきまへがたし。
いとちゝふおぢて。袖ばかりぞふこうかしこゝろぬぐ
ど。えゝそぐ。さらぬそいとうまるあ。老ゝ波。ちゞ老より
もゞひりてゆゝしうハいみしくいとぬべれバ。さもえ
おきゞつひぶむきゝてやとぬるがいとゝちをゝきまくか。
ひたぎゝ條。
ぬゝつゝ孫もおつゆ。高年老てハいとゞ。ちゞうそひつ

もゝよゝとなげかるゝこゝろ。いとゝかりそめに。世ちうにうゝ
ごろ。ゝゝとして。いとゝ伝るまも。こゝ今元笑つる世ごふ。やごそこ
ゝれぐちなるハ。こゝゝゝいつゝあひるきうぐふ。ちもゝ。

なゝ

旅ふして。國を巡るちゝゝいつゝ。他郷(ヒトノクニ)うゝうして住る者なゝ。
かゝ住し里ゆいつるにてゝ。ゝゝ。ゆきゝつるよりつゝの旅
まをいつゝ。ゝゝゝゝぬるゝし。ゝゝ。ゝゝバ美紫集古今集なゝ。
ゝゝちゝよゝゝハいゝゝぐ元ゝゝゝゝ。美紫なゝ。ゝゝゝハ。ゆきかゝる旅ゝ
てハ。ゝをバ。ゝゝゝゝ

勢冲ゐしはをゝ〳〵・谷殊屋といふ屋ハ古坂の高岸乃あ
〳〵ゝと・ゐさ〳〵町〳〵いふ所ゐて・今も小ち中てけり・かのゐし什屋ふ
てみまかりて・墓もそゝふけり・宝保のころ・五井純禎といふ儒者
の書〳〵る碑文もゝそゝと・そゝ〳〵什屋ハ・ゐゝ和泉・ゐ和泉郡
池田今茅町村の伏金茅ゐ赤地の内・幣垣園といふ所て・そこゝ
住ゐ〳〵を・雑波ゐハ陸ふゐ・ゐ〳〵ゐて・そゝ〳〵ゐ伏金
氏の家ふかのほゐ〳〵ゐ・そのゐ〳〵よみ〳〵・みづゐ〳〵ゐゐ・ゐゐ
ゐ〳〵ゐ・ゐ伝へゐ〳〵・今もの〳〵ゐゐゐ・
者〳〵いふる
ゐ〳〵ゐ文書に・ゐ〳〵者ゐ〳〵いふゐ〳〵多〳〵什者・家と中

でゐゐと・下の伝乃かゐゐゐふつきて・てへとバゐ〳〵とゐゐゐ〳〵ゐハ・ゐゐこ
とゐ・こゐゐ上の悟ふつきて・ゐ〳〵て・ゐ〳〵とよむゐ・てゐハ・ゐいへと
いふゐゐ・

ゐゐもがさ

日本紀・畧云・長徳四年七月・天下・衆庶頻疱瘡・世号之稲目瘡・又号赤疱瘡・天下・无免此病之者・但前信濃守佐伯公行・不患此病・ゐ〳〵云〳〵・今年天下・自夏至冬・疫瘡遍發・六七月間・京師男女・死者甚多・下人不死・四位已下人妻最甚・謂之赤斑瘡・始自主上・至于庶人・上下老少・无免此瘡・只前信濃守公行不患・

尺しるし。稲目瘡と名をつくるハ。蘇我稲目大臣の事なるべし。書紀欽明帝の巻十三年。疫氣のおこりしを考ふべし。又敏達の巻に十四年。天皇與大連卒患於瘡云々。又發瘡死者充盈於國。其患瘡者。言身如被燒被打被摧。啼泣而死。老少竊相謂曰。是燒佛像之罪矣云々。おりがさ

ふやありきしかさかさけす。崇峻の御庫の別。也ふ今年例乃もがさふをうつて。いと赤きかさこまうかるいでて。老ることかきあ上下ワンぐ。こまなやこのくちうて。やがていづくふるくびもあ

ぶしくえくとうこうこかの書德の年ちびのてし。又崇峻月老ふも。おくしハうりがさといふ。祇いできて。上中下とかぞやみ

のしるふ。ちぐやまね人乃ぜちびやしかりなこと。

こまハ。崇峻二年ちくしたぐちくいてハ。德の年みて。そ

ちより廿七年後し。又布刀。ふりがさいできるるすえ

えて。おナニ年ふいでしたびハ。老るるかきとかく。おやこもとぐ。

一ふやミれて。おきくくるくれくぐをるるとうりぜなも人お

ちくこせうこれを兼暦元年みて。さしの崇峻二年より。五十三

年ふうくれうり。赤りがさハ。ちちかせふをくかこいふ瘡し。

天壓神

或人。書紀の神武の巻ふ。天皇ハ天壓神とナせ。おそうなる。

いうなる。ふ。稱ふ。ちくふ。向ちくふ。義きくく。神武天皇ハ。天神ふ。

名告りて、おびゝしき清軍を率て、大和国うのゝ原に坐て、
その手勢はさかりふして、敵を破り給ふて、物を壓ひごゝろ和
らゝゆるふ。その手段は和の国人のいゝ恐れ、かくハ中を清
ゆるべし。けそのおしがゝ傳べきし。ためあるの神ゝよるへ見し。
壓者飲蒭ゝ行るハ言は居ゝる方を以て注せるおて、仏例多し。

熊神籬

或人、垂仁紀ふ、新羅王子天日槍おてまうでまつる寶物の
中に、熊神籬一具ゝ行るハいかゝ物ふらゝ、ゆふこゝけゝ。
爲ゝ知りがゝよもべし。まのゝのを添てよしゝ。
熊ハ偽字ふて、隈隱なゝ。日ふて、隱ゝこゝりて、霧ゝ沒を

いふ。ゝて、こゝる韓ふ。て神を祭ふ。ゝ神躰を坐ゝる具ふて、世
ふ佛像をいゝとおく、厨子ゝいふ物ゝ作りしゝる物ゝ
べし。ゝハ宮國の神籬ゝハやうかゝりて、神をかこみて、内の行ゝ
ゝふゝ。隱ゝ。ゝ。ゝ。

嚴擅といふかの日じ。また嚴之御魂とは。天照大神ハ。伊邪那
岐大神の。檍原の御禊より成出ましてを。清らかなる御魂かの坐
ゝしかなり。

内人

伊勢の神宮に。大内人小内人といふ職ある。内人の義いふこゝ
人の問きかの。答へゝ。書紀かの中臣鎌足公ハ。内臣といふ
ことを。續紀の天平勝宝元年。又天平宝字元年ハ宣命かの。大伴氏を。
内兵と称きゝ。神ゝ。内物部といふ称もあるなり。
ゝゝみな。内とハ。神かの親しきを。ゝふゝ。されば内人も。大神宮
かの親しく仕奉ゝゝ。ハ称なるべし。

崇神紀ある小児の神託の詞

ゝる人の。崇神紀云十年ゝ。ハ。ゝ。冊後の氷上乃人
氷香戸辺が小児の。神託の辞乃ゝハいふゝ。ゝふこゝ。
玉妻鎮石。出雲人祭。真種之甘美鏡。押羽振。甘美御
神底寶御寶主山河之水泳御魂。静挂。甘美御神底
寶御寶主。かく訓べし。今ハ。ハ。ゝ。
ハ。ハをゆゝ。佩をかゝ。ハ。ハ。
延ゝ河。玉藻。ゝづき嚴藻。ゝふこゝ。出雲ハ。
嚴ハ。ゝ。ハ。ゝ。ゝ。ゝ。底。ゝ。
ゝ種。ゝハ。ハ。ゝ。ゝ。ゝ

といふなり。底宝(ソコノタカラ)は宝の至極(キハミ)といふし。底て物の至て極(キ)まるところを底(ソコ)といふ。甘美(ウマシ)ハ底宝へ係(カ)まり。伊神(イカミ)ハ係らぬ。宝主(ミタカラヌシ)ハ宝の主(ウシ)人ふて。司長(ツカサヲサ)のよし。ことみな鏡をほめくへる詞し。御魂(ミタマ)ハ御玉なりて。山川の底なる玉をいふ。ちづをかゝるよハ鎮掛(シヅメカケ)て祭るとなし。甘美(ウマシ)伊神(ミカミノ)なくハ。後くに日ごく玉をかゝるやへなるし。もべてけるハ。神宝(カムダカラ)の至極(キハミ)長(ヲサ)なる後と玉とを以て。出雲(イヅモ)にこそ祭るべくなし。

世の人うぶるふるかゝ海くなる

皇國くかゝるものやうに。神ふくへ。宝(タカラ)ものを古へハかゝるよき人のかゝる衣(キモノ)をもかぶるべし。ぐうにをつるがめく。かゝるを。磯(ミヒ)き女のいみしく。髪かゝるつくり。ぐしに衣(キモノ)を

ぬかぶるかぶるがごとく。ものに。をくをとるに。ほとけのうちのよきにのくにを。ものとびして。そのかぶりにうへるかぶる。まさるとるを。そのに。号(ホ)ける人。ちかくよりて。まくけ美(ヨキアシ)磯きをとんぶこそに。ちびを。ちびを用ふのをとて。かゝるをしくも。るくくにかをいふぞやをべて漢國(ニコト)なるハよりびのるす。実ハにくきがかふをそに。おるひうをしををにぬぐうかぶをつくるにを者なれ。

佛の前にかりの世のくをへ

寺くの仏のまへり。盛物(モリモノ)くを。立(テ)ものなる物ありみどかき花のやうくくなる物。金銀五色の紙をおりてつみ色どりくを。ま

んぢゝ或は蓬屋ちぢゝ（ツクリクダモノ）ふる造菓子は衣の紋乃やうにおゝつ
ゝて いろ〳〵ぬかもおそ〳〵しく作り花をぶとにしゝと世間乃
さま波ろふ その色ぶりかぶりを菓子（クダモノ）しゝで人のまゝで見体
方にのゝ有て備ひ方ふむきゝる所ふハかぶりもなゝ〳〵ぶ和をもも
ちけざるハ見べゝ〳〵ぶ作る人乃ゝるめをかぶゝるのみ也備
ふ体をゝ〳〵しをゝ〳〵むゝの〳〵ぶにをゝ〳〵ぶと見をの
中ふも苦しきハ菓子ふもまゝくけふハ本ぶゝて
作りゝるさへあるぶかゝ〳〵ちをどふもハさゝも編ふゝとゝゝ也
をゝ和さゝ好をを漢也ひ茶のゝ好ゝゝ〳〵ぬやゝ好るもいを
ら世ふ見をひふ乃麼（リ）物のゝ〳〵ふ也ゝまゝひるふ体ゝ〳〵ぶ

世ひ人ゝ見ませむゝとめひ いろぶをかぶゝ好る波文質彬〳〵ふぶ
いひて ゝ也けきゝふ見ひいふゝゝいをゝ好も皇國の古ハ〳〵
へぶ体ゝゝ好る白本の打巻（シキ）ゝ捨杉の紫好ぶ波をゝ言きて
新しき和をを好へ〳〵むぶめゝ〳〵かのいみ〳〵かぶゝ立（テ）ゝる麼（リ）
和ゝゝうをべの見る見ゝをゝゝ見ゝまゝふハいづをゝ体ゝくまをゝゝ
らむ見べゝ〳〵見ふゝゝ見ふゝ見ゝ見ゝ見

うつりやすく質にさかうるがごとくなるときは彬々たるは必ず久しくはもちがたくしてやがて虚文よのつねかりてゆきて質を失ふ基(モトヰ)かりそめに質の美しかるべきもむしろそれにそなへて虚文を加へざるもむしろそれにそなへて久しかるべきもとるべきなり

そもそもむきふるまひより論ひ

世のあしき人の他(ヒト)の説(トキゴト)のいしたをうがちそしり一(ヒト)むきあかるとよろこび

ことばかをもをもさてなまなかしの論(ロンジヤウ)をかたはらにおのづからひ

ろうしるる弦をまげて学の人のふかくかなへむしるるかの

ふてまてふかくびんぎるかしこしかるひ学人をいふそるる

もとげ思ふきぐをまぎてきるべきこふかくびんぐ人のほね

そしるふかかいるほどにたるさぐ大のふ一むきふかるるて化説(アダシトキゴト)

をばるるしるがむるをばんをぐよかるぬこしんをむきおい

ろうるびに他説(ヨソトキゴト)をもるるしとはいそぬをんるるくおいるるふ

てよしときるばかべるはる人のんをれどかるるびそもも

よんるるふるかるびよるるそはるるんる

らばるかるびをもむきふてそるべるもるるがるるをを

むるるべきふかるるをよるるる

まうて、そは伝ゑる人の係り是ばかりふたゝび物ぐさめ行くきて
をば、おのづからとが見ざるてゝ行くつぎこと伝ゑるそれを伝ゑる
まゝ見ごゝろ、人きいふおりつゝむ、是ハ一むきふかゝりて行ぐ
し説をバ多くしゝかがしるかゝるべしとハ思ひぐ物む。

○おゝ後ゝ説のうるゝ

同じ人の説乃（イキヲ）、うゝかしことゆきちがひて、ゑゝかゝるハい
づれよるべきぞゝ、さうがゝくて、大ゝうゝ人の説をべてうき
ゝうちはせゝ多ゝ、そは一ゝうゝハ物ゝだるおさゝ
もゝかゝゝ、そゝめより後（リ）まで説のかゝるゝ物きハ中ゝふお
ゝかゝぬるもゝうゝぞかゝ、そゝめふ定をおきつるゝ物ほゝど人

て後ゝ、又ゝ物ゝ物ゝ物ゝ孝ゝ乃出ゝ物ゝハ説ゝふゝつゝるゝ物ゝば、を
じ先ゝかゝ物ゝるゝ物ゝるゝ説ゝよゝれ、年代ゝ物ゝかゝむゝ物ゝみゆ
ゝば、説ゝ必ゝ物ゝでかゝ物ゝ又おのゝゝめ物（リ）説ゝ後ゝふゝ物
づゝハゝつゝゝかゝきゝ、きゝ改ゝゝゝ説ゝゝ説ゝふゝゝ古
学ゝ物ゝハ近ゝほゝゝ物ゝ説ゝゝゝ物ゝゝゝ物ゝハゝゝゝやゝゝ
ゝゝゝゝゝハ考ゝ説ゝゝべゝふゝゝ人ゝゝゝ年代ゝゝゝゝゝ
ふゝゝゝ説ゝ成（リ）ゝゝゝゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ後ゝゝゝ異ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ一人の生（イキ）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まる。後に八ちべうの字。仮しゝ文みづからそ。神をがをバ。ろうしゝとゝひて。
改めつゝ。文のちふ人乃ろるふハ。ほかをそめかるまゝ。ほしゝて。後の
を中ゝに。ろうきもなきふ。ろうゝざゝバ。ふうゝに。えらびを。えし
人乃ろうふうなし。

沙石集

無住法師が沙石集にいとく。ろうる上人。三人のゐ。ゆうを。三つの腹心。
そうぐめのハ。まえやふ。ゐびるる。ゆかて。鼠ひきられバ。をあれ名を。おも
むもよらべとつく。次のをゝの。を。きりゝ。ものびて。ゐ房ふも。ゐひ
ゝゝバ。うとがひうをゝして。名をとをとうゝ。むとつく。後のハ。ちを
へゝ。ゐ房。ゐおきれバ。鼠ひきて。名ゐ。ゐ細ゐ。とつけふを。

まゝ。
同じ。業ふ。後嵯峨法皇。北野。詣。給。る。花。伊勢。西行。まの中
ふ。ゐ。ゐの音。吉川。いふ。ゐ。梅。花。のゝ。ゐ。を。見て。ゐ。ゐ。ふ。
を。ゐ。ふ。ゐ。梅。の。ゐ。ふ。ゐ。ゐ。せバ。いとゝ。ゐ。ゐ。夫。ゐ。ふ。ゐ。
き。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
小。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

このあ田まうしをしてこれ感入のあまりに賞ハのぞみうしまかるべ
しと作せトされるをバ母ゑるいあのを養母わどのに恩ゑらるむ
ゑろかいへくゆきれど百姓ありゑ代ゑの事公事一向ゆ免
あゑて孫まで遠孔ある伊ぢきまゆ庄下文をぞ賜りける。

まる

同じ素ふうきまるのつぎは日ゆ夕ゑ月代ある入そけ房にあて。
ゑそふゆへをるは。よべの強盗入道ゆかりて寄りていろくいつり。
月代とハむくハ男ゆうらいつぐ紀のまへ額り近き面と髪を半
月の形ふ制てゆうくいゑるとゑ月代といつるとゑやきくいふゆいとこの
月代のゑゑまて近くかくらゆくゑ侍ハゑの月代の跡のきはやう

ふのゑうてゑくしゑ。

東金のまや月乗よくくゑ乗よくくゑ

さいぐくふ。東金ゆきまるのゆゑるとくいつるゑと。東金とまるとを別ゆ
仏ゆ有ゆ。和ゆ物ゆ。四阿ハゆづまや。両下ハまやくゆ別ふゆ家ゆ。
物とぐとゆくゑゆ。かの催る楽の紙ゆかるくゆ一つの金とゑを生
えくゑと。東金の形くゑと立ゆと。又まるの形ふも立ゆとゑるゑ面ゆハ
ゆくゆ。さゑバこゑハ。くゑゆふゆ。ハ。東金のくくゆ。立ゆていふゆ。
あづを暑きて。まやのくうゆて。ゆ七ゑのゑくゆふゆへるゆ。今の
ゑふゆ。くゑゆふゆハ。此くゆ。又月乗よくくゑ乗よくくいつるゆ
ゆ。月乗よくくゑ月乗よと。ゑゑゆる何ゑと。月を暑きて乗よくくといへ

ふるまひ・ものごとをし・おこなはんべし。

百首の事

うたは百首をあつめてよむべしとは、ふるくより家に、ものよりをしへ
ならはしてよめる百首なり。春は春・夏は夏・秋は秋・恋は恋・雜
十をしこれらやまとことばを拾集にもるるなり中ふるくは
をしへなり。

女一の宮女二の宮などは唱へ

女一の宮女二の宮などは女宮・ふたりをへだてゝ・第宮・摂政などか
男一の宮男二の宮などは男宮・男ハ拾ハよむべくもなけれ・ゆゑ一の宮
などはよむべからず・女もいかゝ一の宮・をんな二の宮などぞよみ

つゝむ・なとゝゝばりてはあれも・宮ハよむまじきなり。

侍ふ・ふるまひ・ものごとは・ふるまひ一つ

源氏物語に・佛の御ことを・ものがたり・侍ふ・ものゝ腹・侍ふ・ものゝ
の侍ふ・侍従の乳母・佛の侍ふ・ものゝ性格・この侍ふ二條の小方・侍ふ・ものゝ
らの侍ふ・今の君・ものゝ・佛の・ものゝ・ものゝ・ものゝ
ものゝ・この侍従の乳母・佛の侍ふ・ものゝ性格・この二宮の侍ふ方・いふべき
ふるまひ・ものゝ・ものゝ・ものゝ・ものゝ・ものゝ・ものゝ
ものゝ・ものゝ・ものゝ・ものゝ・ものゝ・ものゝ・ものゝ

結ぶ・いふ・ものゝ

結ぶ・いふ・ものゝ・伊勢物語・ものゝ・ハ・ものゝ二つ・ものゝ・ものゝ・ものゝ・ものゝ

こみの中にあるし。

十干の訓。

甲乙をきのえきのとといふる。本の兄本の弟し。を餘も准へて知べし。庚辛ハ金かねに金の弟形なり。かのえかのとといふる。祢乃ハ乃をつゞまるなし。

乙字はよみ

乙字ハおつといふ音し。似て甲乙を本は兄本は弟といふをりて思へば。弟のうにもつゝむ。又をと老に乙女と書ハいづれも乙ハ。おつの字にて。弟のうふらてる。於の假字なれバ。をとめにもけ字かゝべきなり。

東鏡ふ。建保二年二月十日。坊門新黄門忠信使者。自京都参著。被送蹴鞠書一巻。彼卿去年十二月。被聽紫革襪。宗長朝臣同云々。将軍家賞翫諸道給中。殊叶御意者。歌鞠之両藝也。まゝ同年八月廿九日。去十六日。仙洞秋十首歌合。二條中将雅經朝臣写進。将軍家殊令賞翫之給云々。まゝ同三年七月六日。坊門黄門忠信卿被進去六月二日仙洞歌合衆議判一巻於将軍家。是依内々勅定也云々。将軍ハ寅朝大臣。此大臣公暁ゑ[illegible]

きたるべき方角中に公氏の鬢つくるまつりけるみづからの
鬢の髪ばかり一さらのまきおひて形ちそなはれる事なり又庭の梅の花
をえらびてゆゑしれるとおもはんよみおひたるをいとばぬしまきを
どくおりのみをもて彩色の梅よりをもてるをみは書にもるるしるまき
義久のみづからに中ばつ入をもて宗行をもてつかはしるるをもて
らるるに七月十日に来る家河のうるるふやをもて地をもてよりす
かるるをもてびばに美濃とよみるるを地のおもかけるを地をもて昔南
陽軒菊水汲下流而延齢今東海道菊河宿西岸而
失命とそ書たまはれるをもて十三日駿河玉浮城をもてるれ
るるるるを按象光親卿きのふ殺ともやるるるるを地をもて家名今日

ばかりをかるるばうるるるる

[illegible]

同書に、暦仁元年五月四日、及晩、自将軍家被調進
昌蒲、御枕鏤金銀、并御扇等於公家云、件御枕者、為六
位、定役調進者也、而依被求御進物之次如此云々、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

即今日被施行之唐船者五艘之外不可置之速可
令破却〻〻高麗の筆ならん。まぢも同じ出し
某男といふ称
同じ書に渋谷左司重岡郎従平太男行光郎従藤五男愚息
泰村男真正男などいふ。たゞ書ふも又五郎男などい
へるばかりなるべし。其書にいやしに者を某男といふ也。
宮といふ称
天皇は伊勢を宮といふ。いとかしこき人を宮如かぎ也。宮子
のたまふ〻〻たゞ宮〻中にて行き。郎を中で行ふ也。宮子
のたまふ〻〻也。近〻は釈迦をたゞ宮〻といふ也。

いと〻への聲
古書ふ。称唯と書て。乎と止申とよめる。紀也ば古へ。上る人ふ
いと〻ゆるしも。乎と〻いとうと〻ゆる。又芳樂ふ。否も諾も。源伝の系の
ふ。ふるとうとうとひとてよ。拾遺系ふ。たやうやといふ人ぶふ
をたゞ。たやうやハ。否や諾やと。諾ハ即乎と同じ。今の世ふも。乎と
うとも宇と〻とも言て。若狭秘訓抄ふ。称唯阿ト被出之也と称唯六度也猶
阿ト被出之と言ハ。乎と阿と言ふ。又同書ふ云〻
官掌敬屈高声称唯先有欝音と言る。欝音とハ言ふる声を言ふ
と言ふん。字治拾遺物語ふ。えいと言ふ。又もと言ふ。たゞ
云ふと言ふ。牟ハ宇と同じ。今世乃言ふも。宇と牟とのるの

音をて宇〻といふ也。たゞ今の世のいく〳〵さ。波伊延伊那伊閑伊
などハ。ゆく〳〵数ふいく〳〵へも。次り阿伊。次ふ皐ふかさて阿伊。次ふ阿〻。
次ふ乎〻宇〻し。さべてうちうけくるいく〳〵さ。ゑく〳〵皐ふかきていへ
ば。かく〳〵なるべく〻なる中に。ゆゑなきふようて。いとゝ異なるさまなるべく
なるなり。

人のうせたる後乃ちぎ

人の死たる後のちぎ。上代りハいふ者きも。神代り天若日子乃み
うせに〻時。八日八夜遊とて。楽〻して遊び〻る事どもつゝふ
ゆゑなるものをに〻て。こゝなる事なるハさべく知ずく〻。但〻古楽〻
て遊び〻ことハ。たゞべての事なるし。その事ハ古事記伝り

いるがごとく〻。また死を穢といふこと。神代よりいと〻さもなどそ
きも。日数のうゝ定ハ定まりしハ。後なるべく〻。忌服ハかゝふを
や称びしる。後のすゝし。書紀の仁徳天皇ゆゑ素服といふ字
なるべ〻なるべ〻。例の漢文のうゝにてなるべ。そのうみなるべ
なるべ〻にあるべく〻。伸哀天皇崩ましく〻て。いく〻ほどもなく。神
功皇后ゆ。また仲哀ちぎの者〻しなるも。服なるべ乃ものなるべ
なるべ。そもく〻漢國ゆ。喪服といふものかぎりなく。ゆやうなるべ
しなるゆ。称りてなるべふゆく〻。ゆくにゆくゝ。後きなるべの
ごとし。親なるべふなるべ。しなるべんなるべ〻しなるべ。その月乃きてなるまで
とゝきハやうなるべりゆゆ。みべきなるべにきなるべ〻なるべふなるべ。

をしめて。きはやうふ定をそるハかのあはるべてのうをにて。いひ
りてゆきバ。人りいつるるに。蒔を見ふんの儀うゝむ
るハ。之年況やるで。そやくかゝるさハさめぬべきふかゝ服をき
て。かゝるれをまりてつけ。こゝろぢ。ほうゝんハ。こうせを
ゝゝむうゝふ。うゝしさハやむべきかゝぬ。ぬぎとて。なごう
かゝゝしなゝうむ。そゝふうをべのいつゝうふ。ゝどや。ゝゝを
皇國ふに振といふことは。あかりしハきゝやうかるかぎりけるれう
かゝゝさはやゝなゝふて。ゝしくゝもみじかゝゝと。これぞまゝゝふかほし
むゝりハ。ゝる。服をきゝ。ゝゝるかゝゝ。ゝきて。ゝ。
うかゝゝかゝゝふをかゝるゝ。ゝ。猛バいゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝバかのふふて

を。漢の文帝といひしゝ。王ハ。こよかゝ服をちゞ光ゝうゝ。儒者を。
いみゝゝよかゝぬゝふ。りゞきいゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。おやのをも。一ゝせ
皇ふりなゝひゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
と定ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
うかきいゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
ゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
ゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
ゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
ゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
りゞゝ。おのゞんゝりゆゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
てゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

櫛をなげうつ

建長二年六月廿四日。今日居住佐介之者。俄企自害。聞者競集。圍繞此家。観其死骸。有此人之聟。日来令同宅。延其聟白地下向田舎。訖。窺其隙。有通艶言於息女事。息女殊周章。敢不能許容。而令投櫛之時。取者骨肉皆變他人之由。称之。彼父潛到于女子居所。自屏風之上投入櫛。彼息女不意而取之。仍父已准他人。欲遂志。于時不圖而聟自田舎帰着。入来其砌之間。忽以下不堪悲。及自害云々。とかれも東鏡うつしうつしかきあつめたるなりけるとぞさてこそ

こふ出きるハ伊邪那岐命ハ。黄泉ゑ出ては櫛を投げ捨しるすあ
ゑそこなの。古事記伝ふ引べるとしかりせるあふたふ出せ
るなりと。

梅を花といふる

しらぬ花といひて梅のこふるハ古今集よりまでハやうなる
なり。無沖ゑ[illegible]が餘材おふ[illegible]ゑ[illegible]いてがごとし。源氏物語ゑ
第上の巻ふ梅のすをいふ[illegible]。花のさかりふ[illegible]ぬべくゑ見やこい
つるすりとこなれハまさしく梅を見て花といふ。

白氏文集

白樂天が詩の。皇國ふ[illegible]ふ[illegible]まで来るる。文徳実録三の巻

ある。藤原朝臣岳守卒云々。兼和五年出為太宰少貳。因撿校大唐人貨物。適得元白詩筆奏上。帝甚耽悦。授従五位上。ことし。詩筆ハ。古今ふもかゝ。元白ゝひ。帝甚耽悦云々。ゝ。ふ。詩集を写ゝ誤まるゝゝむ。集ゝゝバそゝ。ゝ。ゝ。ふ。ゝほどのことき。

ゝ人まゝ家集といふゝ

ゝよむ人をゝ人といふゝ。拾ゝ系十七ゝ。三條ゝ故ゝ家ふて。ゝ人ゝゝつゝ。ゝゝの歌ゝ世ゝふと。又家集といふと。古今集ゝ字序ゝ。拾ゝ系日ゝふ。天暦ゝ。伊勢ゝ家集ゝふゝゝ。ゝ。ゝ。

のゆりふたつゝびいつゝ後のさゝらこ。

芭蕉葉はさゝひゝいふ歟

和名抄ニ蕖ハ爾雅ニ云フ其ノ本ハ蕖郭璞注ニ云フ莖下ノ白蒻在ニ泥中ニ者也ト和名波知須乃波比ト。このさゝげその蕖字波今のもとをかに藕とさゝハ得し。今ハ古本ふるハ別ふあぐて。波知須乃祢ト訓ル延喜内膳式ニ荷葉稚葉七十五枚波斐四把半云ゝさひハ葉ふつきしる歟ゆゑ。

ふるさちとなのさひとはめるハいつゝ好るやうなとゝ。ふたゝゝで蓮をもさちとなゝ。ふるハなゝとはめとバさちとはさひゝふゝふるゝ。

長谷流させゝふゝ

紀長谷雄紀ニつゝのさハさせをとよめゝと云ふさりせとゝ。

俳家ハさゝゝもさゝ。但し蒲ノ条書ゝ条ハ条ハゝ何ふさちせゝい

へふさゝふゝ。信明集ハ芭蕉葉流ゝふて。長谷をバゝよゝ

流ふもゝ。

ほゝぎすを時多ゝ多事

文選の悲哉行ゝいふ詩ニ。時鳥多ニ好音ゝゝふハ。さはゝすゝて。

さゝ時ゝりゝゝはさ流。時多ゝいゝる。さゝとバかゝゝぎすを時多ゝ

加ゝゝと。さの時ゝゝ。如いゝるゞ。つひふのおとさはゝふや。

法親王入道親王

北山抄の御佛名條ふ裏書ふ天暦九年十二月廿二日入道親王依召参候云々法親王依仰彈和琴ゆゑあるべし後世ふハ親王ばかりあるべし後世ふハ親王にあらぬ法親王と中せり

李部王記

李部王の記といふ書の名ハ李字ハ仮名なり西宮記北山抄ハ李字を引きたるハ吏字なるべしかとも吏字をかきたるハ誤ふ侍るものなるべし

法親王ハ名ばかりなり親王ハ名ばかりなり

續世継ふ覚行法親王ハ宣旨かうむりたりしかとも親王ハ宣旨かうむりたりしかとも親王の名を給ハるなり後二條おほ出家の後ハ例なきよし侍りしかとも白川院ハ親王といふなり

ひとバ法親王ハ親王なかるべしとて法師の後親王と宣ふ

を給はしかくて後ぞ法ハ親王にもなりぬ

王きとを給ふ

門院と中ハ法皇ハ法皇ハ親王の法例ハ今ハ世とも

の女院の院号かずの名すく侍るべし陽明門も近衛みかどうら
まバ世例ふよりて法皇世給つる郁芳門待賢門などハ大炊御門中
御門ハ伊所おもく侍るゆゑ郁芳門ハ堀川院の御代給つるゆゑ待賢
待賢つ院乃院号ハ鳥羽院給ふ給ふ給へ給へ法皇ゆゑ給ふ
で給ふ給へ給へ郁芳つ院とハ法皇なりきるゆゑ給ふ給へけ
まバ給ふ給へ中納言とハ人の名ハ法皇にのゆゑ給ふ給れを
ふにゆゑ給ふ給へ中御門ハ法皇ゆゑ給ふ給へ給ひふ給ふ給ハ
むみかど給ハ給ハ給ふてハ給ふ給へこの御門ハ中御門上東
門のおもてよりハいづる給ふ陽明門の方ハ給へ給ふ給へ給
奏を給ふ給へバ一條二條ハ中御門ハ給ふ給へ給へ給へ給へ

是宗長和尚ハ今まゆ宗長和尚ハ陽明つ院をやうゆゆゆゆん
の院とハ法皇ゆゆゆゆハいづるゆゆ給ふ給へ給ふ給ふ給ふ給ふ
給ふゆゆ給ふ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ
天皇御院号給ふ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ
土御つ門内大臣通親公給ふ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ
ら給へ法華寺に給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ
給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ
給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ
給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ
給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ給へ

かはなどとよび、新しくハ法皇の御願なれば、法勝寺などつゞけてよびなし、法勝院号ありて、新しく作りたてる中に、殿下よりをかむとて、をのゝ定めらるゝ日、陰陽成院と号し奉る。なほ日に泉涌寺に
しゝ火葬し奉る。此法皇、はたちまちかどよりはたちまで、
西河院、時慶つけられたる。并遐記ふるしなり。

高階、為章の名はそれ

續世継ありしなれば、いとしのびかたきことゝいひけ
るに、白川院の、さもあらばきこえよとのたまはせけ
るを、おのづからきゝ給ふ。なるべきことゝいひしかども、世ごろを
ふるに、なほ、なりきゝ給ひしかば、改まりしをゝや、白

川院ゝ、なかなかにもゝ作せ給ふ。ぞうぞ、ありきるとて
ゝ、ゝ、ハ言階、為章なりしなりけるハ成章、むかしのきゝを宗
章形ゝ。

高倉ゝ人の名ゝ

日本法性寺殿ゝ道の作ゝといへるゝ法ふ。まぶをゝ、おゝ
きゝいはゝ、高倉殿などゝゆふ人ありて、基俊後形を
どりふ。ゝの高ゝみぞとふ。名かゝゝて判せゝせ給ぶ。せゝをゝの
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ。名かゝとハゝ人の名ゝ判者ゝ名ゝ。

重集ゝ

日書云。ゝ、ゝ、ゝ。金葉集ゝ、ゝ、ゝ。ゝ、ゝ

小野道風が書る古今集

安元二年古上五月五十八日書れ記ふいとく中文伊方おく
月西ノ。みちかぜがかきて古今ばかりをかふ。

佐保姫の社

京ふ佐保姫社といふ名ハ西之條公條ゑれ之発系法の
化の形くのつくりの形ふ佐保姫の社ノまつりしふ〳〵ハ

後成ノ正治奏狀ノ。法鋪が續詞系集と中ハ古ちぎく
をたるつるて。二條院の勅撰ノ中ハ形そむと中ハ
うけ〳〵しうぞ。伊義引ハざりしとこそ。

俊成ノ正治奏狀ノ。法鋪が續詞系集と中ハ古ちぎく
をたるつるて。二條院の勅撰ノ中ハ形そむと中ハ
うけ〳〵しうぞ。伊義引ハざりしとこそ。

小野道風が書る古今集

安元二年古上五月五十八日書れ記ふいとく中文伊方おく
月西ノ。みちかぜがかきて古今ばかりをかふ。

佐保姫の社

京ふ佐保姫社といふ名ハ西之條公條ゑれ之発系法の
化の形くのつくりの形ふ佐保姫の社ノまつりしふ〳〵ハ

后鳳凰院のおほせ

云條内大臣有房公は野寺の殿の序に云、けごろ為兼つく
いて人、先祖代々の風をうしなひ、累世歌道は義成やふりて、よそ
ほ[illegible]ども、をのづからやまとことばの柴にもつかず、をのづからの
郷を和歌はうしなふ、ゆえなき作りかたをもてあそ
やうとて、をのづからの先に思ひ侘ぶ、くるしみをかく
てやまむ、今又さとびうれへぬるふるまひ、まことのこころやまと
をもひとるなきといふりかの作あざとくひろく、為兼の子、
柳下恵がおとゝ、皆おろかなりしうへ、ハをあれはべ、からべ
ことかるべきふかくべし、又佛をぶつ法をバ、あまねくあらし

形ふるゝ、獅子身の中虫とは、獅子は虫をくらふ
させ給て、その虫のふるとぶ、内外の法みな、をそをつゝふほ
人、を義をいやまるらとをそれゆくゝかて作るバ、あはき
も、あはきあらはせしるかはきてふて作るかのつを作門
の法をゝみ作き人をゝ作るかふことをそをてみりしか
乃うゝ作ゝ歌ゝやしをとんるもよりなるべきるぞ
ゝ作るバゝくゝくまいやまるべやしがゝくゝ、ゝるいの
器頌ゝをんはぬへ、をと、あハ人をゝ作ゝをゝみくせ
ぶゝんをかれにしをゝんををかゝ、をとぶ法をかをて、をぶと
をかをを、風情をかをを、をて、風情をかりをを、姿ををゝひて、

とかるばかりなるべし。古聖とうつして。古聖をうつさんとおもふて
なんぬるとかはるべし。

花窟

花窟といひしはそもそも今のぬし寺その跡し。後世絶ぬ。花窟を大
伝有にたはぶるといふてあり。仁和寺ふるねぎといふそしるふぶを
ばうばいてうひめふと云。むしはうちあるうちまで。仁和寺の地
ちうしにこそ。花窟帝(ミカド)この比ふ雑(トツミヤ)あるとしそさを絶てかくて後ふ
寺にたちそれし。

めうこの絶をいふものゝ説そうゝ多しる

りはこうはの。の経書といふ和八法釋。漢よりはじめ四しやの

と。宋の代乃儒者のしそのおもむきいとゝ異なることなく。又支後
ふる。宋儒の説をおそゝぐくやぶりうるとあり。そとゝ経書ばかの
ふの道を載せしる書にて。うへりなく。意見和をそれで。その心ひ一つ
り定まるでハかるハぬるなり。がゝにがゝはゝぐゝ苦よるを定まりづゝく。
るるゝぐゝたれど。まことそのあるはるの。善悪是非(ヨサアレサ)のいとゝうなるを
ぢ先をばいうでうよう定めうべきぞ。ぐぐ。皇玉のいうへのぞ。おもう
ふ定めて。ぐぐゝしに論ひよ及ばぬこそかてまきうてハかの
るを。又はは宋儒の格物致知窮理のをしへてそいうとゝをそれ
をゝへるゝ意に経書はもひをぶふゝ。なるつくをこはるふぞ
しそふふを説そうぐ。なるのと。為はの理を。誤りたくハいうぞら

よくうたがへんかをくをこし。
ゆるゝ人の説ところをくらぶるに
をべくりゆるゝ人の和の論ひをつけるくらぶるに
ていづれきをいづれをとるべき。宋儒の論ひを。ところ〳〵そしり
係儒者は多くれど。そもそもいとうとかなのふこそ
を。給いふものをたゝかこそ。

兩部神道

大〳〵天下の神社。中古よりわかれしのつゝるが多く形をかは
ら。さゝぬ社をバ。偽ふ唯一といひほゝしけつゝる社を。兩部
いふ。又別ふ兩部神道と名のゝ一をがれるをつゝ説ふいそく。

聖德太子舍人親王もみるあり兩部神道をこし。さて空海諸道ふ通
をして。神道の奥義をきハめ。此兩部神道を中興をゝ。嵯
峨天皇ことに感感ありて。兩部神道といふ号宣下し給ふ
といつゝ。これ皆そゝごとし。さゝ説ざるハ。神儒佛の三教
の勝を取て劣を捨ていひ。又今日目前は萬物の理を以て。天地
乃始終をもとゝるといつゝ。今論をいそく。こゝもみゝいみ〳〵きも
ごとし。まづ三教の論をゝるとハいへども。その説るゝ色をゝ
見ふ〳〵儒〳〵佛〳〵とのゝ取て。神道をもとゝ説をゝ。
らふなり。さべく佛のそ説むゝ〳〵。儒をもゝ〳〵。天文のゝ
ををくいつゝ。かゝて神道をハ。書紀の神代巻は。天地のゝ

この取乃・涸色乃漢文と・圃常立あど神のたなを・をりく・ちる
ぐかりかをるをいつを・を道のをとをとは・多ぐかりもなてぐいつぐでうこ
も沢神をとを名づくることをえむ・又天文のるりもさくふをおそのの
づくぬをし・さをし・縁を取て・劣沢捨といふをとをを・いををかし
りを・縁をも劣やをも・行をりをりて・定をくるぐ・くぐみる己ぐんりかな
ぬ・くを沢勝くく・己ぐんふうねをぐるを劣くせるふて・うねるをを・
の縁劣ふをを行を・その縁劣ハ・行をりてう・徒さむ・をべくまをく乃
理りを・測をかぐうに・祖をれぐ・おのををを・縁くをひ・こを・当然の理
をうをを・をへぐる・行をくくぬををのをを・縁くをひ・こを・当然の理
の前をうふき祖のをををうを沢・をを・元人のんりを・今日月

むるををえむ・うの家儒の掐物窮理あどいふるぐひいをうき
ふがををし・をふ什五紀神ををといふ祖を・ぐを己ぐんを主人をを・
神を聖人をを・奴僕ちをを・んりを・海をせて・かりつをひくる祖ふ
くを・神の伝典をを・佛の説をを・儒の言沢を・己ぐんのぬくを説
をを・ぐをををををバ・みを方便ぐ假説ぐ表事ぐ形ぐいひを・
をを・をぐるふをふをを・ふ説くるハ・佛のををふを・行くを・儒のをを
を・行くを・ぐ・ま・をを・神のををにあるくぐるをを・ハをを・ふをいをぐ・くぐ
ふのぐををを・伝・於ぐり道形ぐを・神ををくを・も名づけくるハ・
いを形るふぐをいふを・儒のをを・佛のををハ・行ぐ・ぐ・ふををを・をを
をを・ぐをふる道ふを・神ハ道ぐ・をふ沢本ををを乃ををれ

を後の君といへども、よの人なれ。他国にそふ人なんよりハ、国ぶく
ハ吾国乃そこ況こそハいかもあそこ思へべきも、さてぐふ多く
ひろ抽なれバ、ちる者人をおとしむをきさうふ。ヒが国に道といふ名
をかりこそ抽ふしてしかそもがづくの極と云る者のほくしたなども。
極こそ者きる。そのかを形和ふくに神をこもて
みあのぐるなふ。まづそ神を引こえて。おのゞ道の中のあふこそ
てかしこそも佛の奴のごと侃ふて人のをこつさせこるあぞう
しちりに号に毒紀神その神道といふ名も。けんぞへを汲てし。
まる
儒のそこりハ。よろゞを陰陽の理をりて侃き。そのこへよ又を極

無極といふりのをりをわ。極もどもそのを極を極をいう形るこ
そろもいふ形ろなふ。を極無極なるぞといふむふこそふべき
ようなきゞなり。かの毒紀神そふ佛のそに密教の義りよ
ひて。今一きは上を侃てこもに阿字真如海變動自在の所作
あどいしこそ。めろくに道ふ揚もこるゞ。ほられども。そ乃阿
字真如をいう形る理いうる国孫まこ。変動自在形るぞといそ
もりハいうゞこそへ号とさる。そゞ抽の理をつぎくふその本
をおしきハそりそゆくこそきハいう形るなくもいうる理こもこ
係べきふりこそ。ちしふ号りやしたふおつるも。極をバ陰陽を
を極無極を阿字真如もみるかりちさへづりぞこりこそお

こゝふハこゝ理あるゝゝ形〳〵・えゝちきいゝぶゝごゝしゝ・みゝ如
の無明を生ぶるゝいゝあゝいゝゝんゝゝ・真如ゝゝんゝゝ・無
明ハ生ぶゝゝるゝ形ゝふゝいゝふゝし生ぶゝるゝふゝ・その本ゝゝ
きゝ為ゝゝゝれ・不覚ふゝるゝが為ふ・忽然ゝ・空明を生ぶゝゝいゝふゝ
きゝど・御ゝゝバゝゝ・不覚ハ・又仏乃因縁・いゝゝ形ゝ理ゝゝて・不覚形ゝゝゝ
ゝいゝゝぐいゝふゝ・又不覚ゝゝんゝゝゝに・生ぶゝべき因縁ゝゝゝゝゝな
ゝゝて・空性の生ぶゝべきゝゝ形ゝし・その因縁ゝゝゝゝハいゝふゝ〳〵・
生ゝゝ
ゝ如仏道ゝゝ者のいゝゝ〳〵・ゝゝ如の変動ゝゝ伝て・空界ゝゝ自在
ゝ像を生ゝ・物ゝ形ゝしゝものゝゝゝゝゝゝ・言語ゝゝ断ふゝて・視ミ

ふゝふゝゝゝ・ゝ・きゝゝゝゝゝゝ

まりてんるハ。ゑどてし。又梵語和解語などゝ申るが。ゐるも
で。そゝ。ゆるかまを取まる地と。ゐふ考わ。まづ梵語をうて。その
ゑふをゝゝるハ。ゐるてゝなゝ。ゝもゝ。申るが。ゐるハ。おのづゝ。はゝ
とし。ふ。ヨロヅ。あはゝ。ゑ乃ゆふハ。おのづゝ。申ゝる。ほゞ。ほゞきも。形どりなゝ
らん。又今の和解のゑゝ。ほゞきハ。寺郡。コホリ。などゝ。ひゝ。まゝし
ゐ韓語をゝわゝし。いゝゝへ三韓ハ。りはゝ。を和ふゝ。ゝがひめゝ。
考ふ。ゑり。西ひゝゝバ。おのづゝ。かのゐ乃。ゐのゝ。ゝもゝ。みゝべゝ。
又ゐゝ。ふゝ。ゝ。ゝ。

儒者いと老たるまでふかくまなびをこたらずこれは言と物と
あはせつとめバ皆そなはりぬべきことなれどかしこき人の
ことなれば俗人のこゝろ及ばぬ事なれバ佛者（ホトケノモノ）の
云ふこゝろ也〻（ホウシ）俗ぞくにも考ふべきを学たれてうつしたる和
歌の道こゝろざす人書ふまもしく見しる言ハ有しも儒者
もかくのごとくいふべきなれどまことの学の人の笑
ちりぬべきやうにいふべきよりはきものをや
和学者詩つくるべきやうをべくの伝
ちりぬるをわかよたれそつねならむ学者の学問のかゝる

を作るべきなるべくこゝろ中ふいつるやう所論作り好ひ二三
百とつくるの詩を社中の人に示をべきふりにて後ふ詩集ふ
収録をべきにもつゝざれど古人の詩を盗み好く剽竊して作
るあるべし有り具足しがるくハ唐詩選明詩選詩倍碎珍
どやゝの物にして補綴してこゝらゆるがよたしくいつハまこと
ふるきをしへなし古人のもものいゝちるにこゝろ
おのゝ思ふこゝろあゝふよみ出むとされど方はやうなる
らぬ心ばかりのみ出まてこゝろ後までもさるこゝろせはのぞうとがる
きなるまバうしまれびのわどハ何のつゝきるゝ人のおりしきもゝど
ゆのうるゝ所にうるてそよみうるふべきうるぞしる。

ゑハ何とえらぶべきまする

を業物ゆゑ。みちおりふてる月ゆゑ。ふるまひこゝろひぞ秋の

りゆゑ。りゆゑとよゑと。時の人。和ゑの何とゆゑ。ぜと雜

じゑ。ゑゑ。ゑゑ。みちよみまひ。えゑびゑいとゑとゑう。

小大君

三條院女房人を近を。小大君ともいう。そハ小大進（コダイシン）といふゑを。

ゑぶきていつる時まハ。こゑぶいの君とゑしべし。こゑゆきとゑも

ゑゑゑとし。けん小大進ゆゑ。徒（シヒ）ゑ。業花物語ゑゑゑ多ゆ考う。

ゆゑハゆゑ。ゑきハ歌ゑふ。といつる。ゑゆゑ。ゑみ人。東ゑ女房人小大進

とゆゑを。東ゑハ三條院し。けゑ小町（カ）ゑ。いふ物ゆゑゆう。ゑべゑけ

小町ゑハいゑも信（ウケ）ゑれ物ゑて。けゑ小大君ゑゑゑゑ多ゆゑハ小大を

小町ゑまゑゑゑつゑ時ゑべし。物ゑを考ゑに。ゑの時ゑけ小町ゑ

ゑゑゑて。小町ゑゑて入ゑを。ゑゑハ。ゑゑし。

月ゑ物ゑ

月ゑハ今ゑふ考ゑ。といふ物ゑ。ゑゑて。ゑゑし。ゑゑを。ゑゑゑし。ゑ

ゑといふ。ゑふゑゑし。といひて。物を。ゑゑ紙ゑ。ゑゑに。ゑゑ

ゑの名ゑ。又ゑゑゑ。ゑふ。ゑゑ色ゑゑ。ゑゑゑゑゑ。

ゑゑを。ゑゑゑといふゑを。けゑ月ゑ。ゑし。今の考う。

ゑゑゑし。ゑ或人いう。

持明院

持明院とは上立賣の北、新町の西ふかうして、りやう持明院家の先祖、中納言基家卿の家し、御子後堀河の女房なりしによりて、後高倉院の妃北白川院（キサキ）に基家卿の女房なりしによりて、後高倉院は持明院ふかまりくにより、後堀川のみかどに位ありしを、後ひ院かまりくにより、うけつぎて代々ありかはりみかどの所とりとり、或人の說し。

土御門内裏

土御門内裏は土御門南、烏丸西に、拾芥抄ふるしるし、或書に、光嚴院より、後奈良院まで、此内裏にまします、明應凶事記ふ、後土御門院の御葬を記せるふ、御車路次、正親町ヲ西行、室町ヲ南行、近衛ヲ東行云々と、又二水記に、後柏原院の御葬の路次を記されしるしたる如くし、此ものこと、ろ北へ高くして、一條の南づまでも、内裏ありしふ、しるふ、その西表の御門、正親町にありて、ありしとは出ひしるべし、又内帝は御所を、東洞院殿とやいふ、土御門東洞院ふ有しはしるしるし、ちもバ御所ハ時々ふかりしとづ、地（トコロ）ありて、たゞかしとは、かゞくも、皆内ゞ廓乃内ふてゞ、ありつゝん、さて今は内裏は正親町院の御所、伝長久秀吉公などの時ふ、造営せしまゝ地なるべし、こゝも土御門内裏の外廓は、やうくふ東へ北へ高くなりる、今は外廓とハ、ちがうとおゞしくは、バ、後内ゞ廓の内とさてとは内裏ハ、正親町ふ行くる、後の御諡（ミナ）ふもつをなすれ

ゝふやゝこゝも或人いつ。中原康富記ふ。文安元年九
月廿八日云〻。去年九月廿三日炎上内裏之御門四
足。土御門東洞院面。号左衛門陣云〻。文安八。後花園天皇ゝ
大神宮の外宮
百錬抄云。長久元年七月廿六日。大風。伊勢豊受大神
宮。正殿并東西寶殿瑞垣。悉以顛倒。同八月四日。諸
卿定申。大神宮外宮顛倒事。主上殊歎息云〻。
大神宮外宮〻中せるゝ。長久ゝ。後朱雀天皇
の御宇ゝ。
祝部成仲九十賀

同書云。文治四年五月十六日辛亥。日吉社祢宜成
仲。結構九十賀。好士多以行向。可然之卿相送和歌。
信補。新古尚歯會
義安二年三月十九日。白川の寶荘嚴院ふして。藤原信補。新
古尚歯會。
前馬寮助藤原敦頼八十三。神祇伯
顕廣王七十八。前石見介祝部成仲七十四。宮内少輔藤原永範
七十一。右京権大夫藤原頼政六十九。信補六十九。前式部少輔大江
維光六十三。以上七人。
この尚歯會記。
明和の
奏壽宣命の儀

三代実録十四云、貞観九年正月十七日、二品仲野親王薨云云、親王能解奏壽宣命之道、音儀詞語足為模範、當時王公、罕識其儀、勅参議藤原朝臣基経、大江朝臣音人、就親王六條亭、受習其音詞曲折焉、故致仕右大臣藤原朝臣緒嗣、授此義於親王、親王襲持、不失師法焉、とゝ、此文板本ハ一ゝぐりにかゝり脱ゝゝと、今ハ古き写本ふりて出つ、さていふゝゝ、奏壽宣命の法のゝ、ゝぐわ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、書籍目録ゝ、宣命譜といふ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

大将以下、位をはじめ人々、えびらしく、おりゝろし、かみあげ（髪上）ぎの乃内
侍、この侍所より、おなじ内侍（少輔）せうに、侍所にたちやうぞく
をとれぬ。殿ゝせ給ふ。えし作せてゆるす。まりのきじ（職事）
ゆせで、南殿へなゝを給ふ。たちに（輿）をされぬまゝ、官廳
やゝへいるぎこう（勾当）ゝもまゐる。かゝの家ゝ得（選）せんまうきれ
で、車はちゝふのせて、うちんのちやうはゝむきまゐりて、
かゝみあまたゝめて、ゝ朝ゝとゝ右へ南むきゝ、勾当ときぶ〳〵へで、
やゝ〳〵ゝ幸ちうづうせおゝり〳〵ゝゝたゝて、ぶの公ゝ次第（次第）ぶいまち
ふゝちゝゝゝ、たこ（輿）ゝ、せのひぬ、美白反はたゝがゝゝえきな
ゝ〳〵ゝ内ゝゝせゝ侍、公ゝはたゝけまゐりて、きん（勅使）ゝとて、内

侍ゝつゝへゝ後、たこ（輿）につきて、ゝうゝ（綱）ゝゝけゝきぬ、奏を
ゝ、主上いゝを給へば、殿ゝ侍ゝ（簾）ふまゐゝせゝひ、えゝゝのみを
ゝゝゝはゝゝゝきゝゝゝはゝりやのはもんゝけられ
て、主上大ゝやゝ（床子）ゝゝゝせ給ふ。きん（勅使）ゝと大ゝやゝゝふ
ゝきなりて、内侍あゝゝ東の小ゝむきゝいでゝゝぬ、後大
ゝやゝしゝゝゝゝゝゝ（平巻）れの侍ゝ産ゝゝ（纐纈）ゝ二帖のゝへ
ゝ侍ゝゝゝゝゝて、ゝゝゝゝゝゝ

て、ぶ〜〜〜

かけ　ゆびりかをつとばりとちづし　つやさちハ
せぬぞ　おうせつふたをけ　ものがく　んもはよく　ゑく
おぼえて　たやすちはし　ゑみみ　へるゆゑ　ゑりつきぬ
帳　寒
ちぎりつぎの役ち　伯　ちくはち三位乃むをめし　みやうぬ　ゑ人ゑ
人　やくはち内侍　ちくはち　ゑ　ゑれそうこきりめく　行幸たう
はち　へゑ　ばはされのこやうぶ　ゑ人はさきふ　ゑ　ゑ後かゑ　ゑ
ぎはち内侍　ゑ人　ゑりふはち　びて　ゑる　ゑはち　ゑのはち　はち　ゑ
ちち　ないしちち　ゑれど　威　下はきん乃やくふまゑりゑひ
ぬ　ゑの内侍　ゑりのぎりて　ゑのはち　ゑはきん　ゑをまゑ　ゑを
ぎ　はち　階　ゑはち　ゑりぎきて　ゑ乃ちゑふ内侍のぎぶつきぬ女ゑはち

ちやうぞく　二ゑ　ゑはゑ乃ゑ　ゑ　ゑ　

の内侍二人、をとうとゝ、こせうより女房、たうしろふたりめをつゞきて、
たハこまし
まゐる、すゑつぎりて、みゐを、ぶせるうふえやをバ、せちぶ（節下）はちゝ、
て、ふ、ふ、ゝ、をきて、しゐちゝ、ゐちゝ、大きゐるかうぐ（香盤）んふ、みやう（名香）がう
やふゐふゝ、ん、ゝ、ん、ゝ、ゐ、こぐ、絲のたゐゝをゝて、ゐ、しゐ、三ゐゝ、ゝ
ゐ、ゐ、ゐ、ん、ゝ、ん、ゝ、ゐ、ゝ、ゐ、ゝ、ゐ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

典一人 大初位官 膳部司主典一人 大初位官 勅依前件

古言清濁考の事

いふしへことばの清濁を考へ定め、今の学ぶいつかたハ異なるをあふがるゝハ何ふるてしるべきいふかた古事記書紀等ハうゑばひいせ西しきとそ清濁をもかてしられどこれらの書ふよりてしるべし此三ツとも書の中かたゝる紀をもはふらぐしきゝ法ふ等集決て書紀ハ清濁混ひしるもおかゝまどなべてハよくとかまゝ等集ハ混ひまくれし古事記ハまがひしるハまゝくるべきもふれふるハまべてのいまゝ西しきばりて是ハ後ろ写し偽まるにてうたがさ

てその中みふごり今ハ業ひつかゝおくるも多きなれ人皆西しきるまゝ是ひあるハ混ひること是ひたるハ清ふ書ひ中ハ清ふ中字ばも書法例ハ如ど是ひをるハくそしかるおとも清ふふまるるふるうたゝば古しゝ今をいふるの清濁乃うるも紀いふ有ふるもるくだ山の松田のうしゝきばれ今ハちべく ひりを清てよみるくまどもハ仮字古ふ紀ふも書紀ふ といで若集ふハこふ多くるまるふるみな清きばうれをのを用ひて清ふと用ひるまるれし一つ二つまてハ混ひるふの弱ひもいるゝむを以ていまうたまてしるる皆同じ紀をりて いまくゝ清 清るてくばまるだし中の言ふも此ふるだひいくおふ古

書は考へ〻ほうて。皆ねもと〻へ知べし。物ふる古き世よみ。古え
を唱ふる。古えはうるふるきもとが。そもそも。今のなりひふ形づみ
て。留るべきを。留まれをふごり。ねがはくは。とくふ定めてよ
むもいとみぐりなるべし。古のをよみむりは。古書のうまり語
留るてるもてうべきなるも。そもそも。おのも。此語留の。古今
とかけるもふんつきていうで。今はうしふかりうば。古えの
かるふるがぐやと。ちやうよりふを。出て。ぞふ古事記伝
のうぐ。先はきふいひつもじむいうなて。りはくはちて
ぞの語留をいるもくかむへうをてはいをしていをうを
しくそひとれぞ。ぞちふも。はりはるもきふおのぐ

をそへのるふ。書は。玉ゆちの。別細田村の人。石塚。新麻呂なんこの
事ふ。ふおそて。古書ぞもを。けりを。ふくかむうへ。ふ〻
て。此ちりたおど。古云語留考といふ。此ちりあ〻りうの。
此考ふよりてこれば。おのもとふ。ふうつ。神代巻伝
ぞどふ。物ふれ〻ふ。ふかむうへ及ばうしこもうるこいふ。
よりびきをそとがぐは。此語留考。かるうべ。えべき書ぞかり。

業好法師が詞のうをつ。ふらひ
きんうぐ。ほうしが。ほもぐ。柔ふ。花ちりふ。月は。ふ。ねき
をのをふる。ねうば。ふいるは。いふ。ぞや。いふ。へ。乃ぞもふ。花
ちさうねる。月は。ふるねきは。ねえうよりも。花のりをふ。ちる

をかうち月はあきも重陽いとひあるハまちをしむんづる
をとゝもるで長くて こゝに涼きと こゝふさるゝにおかるハみな
ゐもちるゝ風のどふるゝ雨りくゝ月もゐるかゝむこゝ風おりふ
んりせちゝかゝるかゝそさもえつゝぬを結きるゝもいづをりゝ
ふハ花霞をもち月に重陽稱びゝ長ハつゝんまゝ風のちゝ
しがいるおゝゝかゝハ人のんゝうさゝいゝる後の雲はさかゝらん
のゝをゝう風流(ミヤビ)ゝを海をはちみやびごゝろるハつゝ風うはちゝ
しがいるゝども此ゐびゝ皆日ゝすし長くなべての人り
稱ふんふとゞへるを雅(ミヤビ)ゝをハはゝうこゝをかゝるゝ意ふあ
ゝ風ゝをこぶゝハゝ涼ゐゝうでつをを拾くゝゝのをお

むくゝをゝ涼きも重陽稱ふつゝし人のんゝ
うれゝきるハゝゝも涼ゐゝおびゝなりのゝしゝぶんふかゐ
をゐゝゝ涼ゝ月ゝを長ハかゝゐるゝぶハゝをゝうれし
きをよめるゐふハん涼きハちくゝ拾くゝをんゝふうをぬちゝ風ゝ
みゝうゝへゝゝふつゝも拾ゝハゝきゝかゝし結ゝゝをゝびゝくゝ
しきをみやびゝうゝを稱ゝつゝむを人のゝをゝの情(コヽロ)ゝゝや
又日ゝほゝしゝ人ゝをゝゝぶゝゝゝをゝ色やをかゝ
べゝをゝいゝちゝゝハ中ゝうゝこゝをゝ人のみゝうゝとよ
みゝよゝかゝもゝふをゝぶゝハのゝちをゝん重陽稱ゝふをハんぎ
しゝ結をおゝくゝしゝよくゝ花やゝ風ゝをふゝびゝ世をいゝ

ひきつる波、さぎよたてくまるハ、そもしみる佛のさふへつゝ屋
ものゝそしおかくハいつそうしゝ、ふてそさもしいへんのうちあそ、それ
うハさは思ふ、しぬそひきれ〳〵ふそ俗ふ紙ふ人のうゝん
色、ものそうきまゞ、ろうハうゝ佛のそ人ふまゞるし、人乃ま
ゞろそいふるびにき男も、そやくゝ志ゞやとハおりそゝ食
そ〳〵まゞものそ紙し、されバ茶紙ゞのゝろゞゞけおふハゝゞ
ものくゝきゝそんるゝ波そ紙ゞひゝそ、中ゞ波ゝりこ紙ゝの方
とハ、そのゝろうゝ〳〵ゝるゝ、そゞく行すも、なゞての云の人のまひ
よさかひて、ゝ紙ゝ波ゝたこふゝるハ、紙おけ(トツク)ゝるひ乃うつれ永
みて、んをけゝりかゞれゝ紙ゝまるべ〳〵

○五ノ十四

うなゞをけゝる云の紙ゝひ
うゞきゝ紙ゝそゝれゝ〳〵、ゝきゝぬきゝ紙ほ〳〵、ゝ紙永てゝる紙
まれ〳〵、ゝ紙ゝ〳〵、ゝ紙ゝえ紙ふし〳〵、ゝ人ゝゝふゝまれまれ〳〵、いの
ち紙ゞらまれ〳〵ゝまるハ、みる人のまゞ紙し、紙ふ、これゝを皆
よかゝ〳〵ぬるゝふし、孫ゞハゞゞ波いみ〳〵きゝふ〳〵て、ゝゞてれ〳〵
ゝ波、孫ゞハぬかれるものゝ、ふおゝるハ例のゝ体ゝきいつゝ
紙ゝ、又ふふ先生紙ゞうゝ紙ゞあゞゝ紙ゝ人あるハ上人あゞゝふを
まゝほゝし紙ゞ、月茶波ゝて、ハうゝゝ、ゝゞるかれゝれゞゝ、
よれ女をゝてハゝふゝかゝらぬゝれ〳〵てゝるハ、俗ゝふ紙ふ永
ゝや、ゝ月花をうゝれゝゝるゝ情(コヽロ)ゝうゝバ、まゝてようき

○四十七

女ふたりなぎらめはうつぐひ。目元をうつくしく女の色ハをふ
もゝ葉ゝびといきんを人をうつくしむものゝんをうつくびいみをき
いつをうふをを有けをゝ忘ハあるもゝをゝよをづふうをべをはをう
かぐるハ拜べるよのをゝむふしうをゝびうれゝハゝりをゝをゝさ
しもをがゝひをきふをうつくびをん。

やゝ拜ひみ

うつくゝ氏の人のをゝ波をふしを。あつがゝをむをるゝ世今の世はゝをく
拜をゝハ皇國ふを。ゝ為こゝ世拜をふを。いをゝををく
なきをゝ拜りき。ゝをゝハ儒者をゝをゝをあをゝをゝをゝをゝふし
て。大をゝをゝいふゝゝ拜きハをゝのをゝをきを天のゝをゝ為ふを。

きをゝをゝ拜をゝハをゝをゝやゝべきふ。をゝ拜き人の為をゝて。つか
しゝをゝハ。をゝをゝふゝ拜をゝハふゝをゝをゝをゝをゝに天ふをを
むゝゝゝがゝをゝなゝをゝをゝハゝをゝかゝをゝをゝやゝをゝをゝえゝを
をゝふをゝひをゝのをゝをゝふをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ氏門をゝ
をゝを祖乃をゝかゝをゝ為をゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ祭をゝをゝをゝをゝんを。
をゝをゝをゝふゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝを

そのたぐひ多くバ、たぐなくぬりのゝ海つゝんだるハ、
そのみゝかはうをふまれたべきよりなくゝもいとゝんはな
ぬゝとゝしふハ人よ浦きうゝみをぐとのこうて、おくなわるるの
のゝ多くゝ元さ、き人ゝ手まよわつきて、しゝつとをもおそうあ
らぐやゝさるハきゝ人ゝてハなふのたぐともつゝぐれども、よぐ一ぬ
しゝひたゝそるゆるふぶふ、ものうとくる地を、まゝてゝくぶ
ふふゝとゝものゝて、よぐつぐもゝるものゝ祭を、うをふゝこざ
浦ぐきゝかはうは、

学者はゝすげうゝたふしゝはそうる
地ゝおぶうゝとがゝ地ゝと人ふうひて地ゝうふふゝとゝたれバゝぶ、

古書は中にも、ふかゝたるゝそゝてゝしゝとゝもゝたえぬぬゝを
ゝゝとゝ出て、ゝふるゝひゝとゝゝへバ書記の齊略は考るを徒、考案
ふてハ、一の尚おる莫置圓隣云、こゝ考る事、おぐゝやうはゝとぐひ
なるがうやうのかるきゝとゝ、まづ的ゝ考ふゝゝふふ、学者の
おゝてハ、ひたるれぐもゝゝバやゝたるゝぐとハ皆よゝ行きゝめられ
ゝゝとゝ、ゝふひまバゝとゝめやゝたるゝぐもをゝふいゝぐえよ
くゝもゝたまへぐゝるめゝ、ゝこえて、ゝげかるきふゝをあ
きゝゝ考ゝゝゝるハゝゝうぐきゝ和きゝるゝぐゝ、ゝゝゝとゝ考ひ
て、ゝゝゝぐめぬゝふゝ考ひの分おるゝゝぐゝるゝえは多るおられバゝま
づゝゝやゝたるゝるを、ゝく考ゝかへゝるひかむうへゝるひゝ的ゝゝて、ゝを

くえしうん後ふてをかうたぬしをバそひかゝべきうぶかをと。

蒼き猨田彦神のをしへとつてる

近き君神を者の説り。道を天照大神は道教ハ猨田彦神の

教をと。みしきふいふかわ。をハ天照大神乃をとといふハ。うん

ぶき波。蒼き猨田彦神のをしへとふてをいとこうをえ。猨

田彦神ハ。皇孫(ニニ)の命は天降(アマクダリ)まを。沸前(ミサキ)ふゝうて。啓行(ミチヒラキ)をうを

仕奉(ツカヘマツ)ると。君は人乃ふこかわふべき道を。をしへるるはゞ。古

書ふうりてをて。ふとをわき附舎(ヒキヨセゴト)し。此外君の神道者のい

ふ説ども。けしるゞひのをかり。みなゝ。ふの教説(ヲシヘゴト)をうゝや

みて。かをふ仰ゝうむをうるをひゝをし。

鳥羽離宮

百練抄云。寛治元年二月五日。上皇遷御鳥羽離宮。

營作甫就(メデ)之故也。云々。件地本是備前守季綱朝臣

領也。去年進上之。讃岐守泰仲造進舎屋。

ほむすびの神

いぶかぎいぶきぬし二柱。大神の。ゐちゝ又ゐ乃神。をちゝ波

うみくて。火産霊(ホムスビノ)神を生(ウミ)ゐるゝ。ゐ乃成(ナ)ゐる者(ヨゴト)ゐめ

みゐて。凶事(ハガコト)ハ。ゐるし波。ふかむすびの神をうみゐる

ふゐるて。いぶかをゐ大神は。黒焼(イハカクリ)ま。くゝハ。ゐの中ゐ

凶事(ハガコト)ゐるゐ。をし。それでほむすびの神を。ゐの者(ヨゴト)乃

絶足。出すはたらめはきはふ成ま世る為う。吉く出て成かゝ
ぬ事ふ神ふ世ち。火を。素戔嗚ふ神と熟〻考の人成を功為ず
くして。又素の神とやきほろぶもまがるもゝ〻ひなし。
こと吉く出てものきくふ成ぬて。吉く出ることかゝる。此
神の御靈ゝよりの形ち。こゝふ武人のいくゝ。伊邪那美
命。女神ふまして。御言先ぐちをひゝ出ふまして。姪子淤
嶋と。よかゝぬ伊弉諾世ることで素戔嗚ふ出事のそ
ぢめとはいふべきを。ぐ和みの命ふ御石凝を。そぐ先と云ふ
ゝいぐ。若へりゝゝ。女神のほ言ふ先ぐちゝ。ふゝりの子ふ
ひつとぐも。ひるかやゝてふれ何を言ふ。又ゝきほふ

まゝと。生伊せる。ハ形ふ吉ふ。ゝ出事とハい
ひぐゝ。ゝゝばかゝふ。素戔嗚ふ為のゝふを。ふゝ出
をまぐらでハえゝぬ。ふゝゝをふかゝぐ。ふ出
土佐日記の附注
古佐日記を解る地。附注ゝて三巻。板本ゝ。佐ゝる人を。
野道生と言ふ。ゝ。始ゝ讀耕斎林氏ふ序。次ふ紀氏の
委き系図。又官位。又林道春翁の序。ゝ出ゝ彰
撰和分序。大井川ふ幸和分序。ゝ出ゝものを。ふそ生
みぐゝふ跋ふ。ゝ。凡例ゝ。余適見藤為相卿手筆之
本。以此為擬。ゝ。序ふ。得惺窩翁手筆之本。又以

別本ヲ撿ヘ其同異ヲ粗解釋スヲ云フ

そもく此日記の注ハ、
ちゝ季吟ぬし抄のゝぞ、ゆゑあるとて、ひろくこの附注と云
ものあるをバ、とりて、人いとくゝおほくれど、今は二つをのせたるなり、
季吟の抄ふ云ふるものゝぞ、かゝ書ぶりなるものゝぞ、そふかもい
ちゝ此附注と云ふ事ハ、元そふ附注をもとて、出る物と
ちゝおぼゆ、ものゝ跡ふ、義治四年と、ひらを、
季吟抄ふ、後水尾院ゝ義治四年ゝとゝるせるハ、いとくゝ、ん、ぬ、
ものからし、こハ、の道を、いひし人の功のふゝりれる
ものゝ、いとかしこふ、おぼゆるなり、